Unit 10 使役動詞とは何か

動詞のタイプのひとつで、文法的に重要なものとして使役動詞と呼ばれる動詞があります。日本語ではちょうど「～させる」に当たるものです。「彼は顧客へ電話した」と「上司は彼に顧客へ電話をさせた」では事態が異なります。ふたつ目の文では、上司が彼に電話をかけるという行為をさせた、ということで、こうした表現を使役表現といいます。

「～させる」に対応する英語の動詞はhave、make、let があります。また、get も「～させる」という意味合いで使われます。

▶ get

まず、get ですが、I'll get him to do it. のように「get + 人＋ to do」という構文を使います。不定詞の to do を使うというところがポイントです。to do には「行為と向き合う」といった感覚があり、「予定された行為」を表します。get には「はたらきかけてある状態を得る」という意味合いがあることから、「人を動かして何かをするようになる状況に仕向ける、そのことで何かを達成する」という感じです。

▶ make

一方、make、have、let は共通して、「動詞＋A＋ do」 の構文になり、to を使いません。これは、A が何かをする（つまり、A がdo する）という状況を生み出すという構文です。make は「何かに手を加えて何かを作る」という意味であることから、使役構文でmake を用いる場合も、「なんとかして、ある状況を生み出す」という意味合いになります。「なんとかして」に強制的にでもというニュアンスを読み取ることができます。

▶ have

have A do だとhave が「ある状態をhave する」ということから「状態の確保」が強調される表現です。make が変化と結果の両方に関心が及ぶのに対して、have は結果のみが強調されます。I'll have my son do the shopping. だと[my son do the shopping] という状況をちゃんとHAVE する、ということで、主語の権限である状況を可能にさせるという意味合いがあります。ただし、「～させる」だけでなく「～してもらう」という意味合いでも使います。

▶let

let A do は「Aが何かをする」ということを阻止しない（そのままにさせる）という意味合いです。I'll let you go. だと「あなたが行くというのを、私はそのままにさせる」ということから「行きたいというなら行かせてやろう」ぐらいの意味になります。